

サイエンスで歴史をさぐる -メソポタミア彩文土器の復元研究-

NPO メソポタミア考古学教育研究所 小泉 龍人

koizumi.tatsundo@jiaem.org

発表者は、西アジアの中心にあるメソポタミアにおいて、世界最古級の都市形成と土器焼成技術の進展の関連を追究してきました。近年、メソポタミア都市形成期（前5～4千年紀のウバイド～ウルク文化）の彩文土器の焼成技術に注目して、トルコで実験考古学的な研究に取り組んでいます。今回は、日本で文系の一分野として位置づけられている考古学において理系の手法をどのように絡めるのか、発表者の研究目的は何か、彩文土器の焼成実験などをご紹介します。

0 やきもの概説

・器のあれこれ

主な器：

土の器、木の器、石の器、金属の器、動物の皮袋、籠製容器など

土器の発明：

東アジア世界（日本）：～約16,000年前；西アジア世界（メソポタミア）：約9,000年前

・やきもの全般

土器：粘土 素焼き（800～1000℃）多孔質 吸水性大

⇒縄文土器、弥生土器、メソポタミアの土器（ウバイド土器）など

陶器：粘土 素焼き＋本焼（1250℃～）釉薬 吸水性あり

⇒益子、萩、ミタンニ王国の陶器など

炆器：粘土 焼き締め（1100℃～） 吸水性ほぼなし

⇒備前、信楽、ウェッジウッド、アッカド王朝 Stoneware など

磁器：陶石 焼き締め（1250℃～/1400℃） 吸水性なし 透光性

⇒軟磁器（波佐見など）／硬磁器（有田、マイセンなど）

1 研究目的・方法

・目的

世界最古のメソポタミア都市文明を解明

同都市形成期（ウバイド～ウルク文化：約7500～5100年前）焼成技術に注目

焼成技術の復元により、都市の誕生を日常生活の目線で追究する